ヒロシマ ユネスコ

特集

広島ユネスコ協会
設立40周年
（1973年6月発足）

『平和文化創造に向けたヒロシマのメッセージ』

広島平和文化センター
小溝泰義理事長が記念講演

平和構築へ、市民運動によって、同じ人間家族としての共同体意識をアジアに世界に広げよう

広島ユネスコ協会の設立40周年を記念する講演会が、さる10月20日（日）、広島市中区の市国際青年会館（アステールプラザ内）で、講師に広島平和文化センターの小溝泰義理事長を迎えて盛大に開かれました。演題は「平和文化創造に向けたヒロシマのメッセージ」。

平和構築へ熱く語る小溝理事長

この中で小溝理事長は、今年4月に同センターに赴任して以来、被爆者や平和運動に取り組む多くの方にお会いし、感銘を受けているとし、平和構築へ市民の地道な活動によって、人間家族としての共同体意識をアジアに世界に広げようと訴えられました。

さらに同理事長は2000年、勤務地の国際原子力機関（IAEA）で、当時のエルバラダイ事務局長が提案した「広島・長崎原爆展ウィーン開催」（IAEA主催）を、困難を乗り越えて実現した経緯を紹介しながら、核のない平和な世界を実現するためには、「核抑止」から「人間共和の」安全保障への大転換の基盤を作る市民社会の運動こそが、不可欠だと結ばれました。

（講演前置きは2、3面に掲載）

記念誌発刊も

またこの日は祝賀会も開かれ、古田碩永当協会副会長が、40年前の設立当時の思い出やその後の経緯を語るとともに、今回の事業の柱の一つである「40周年記念誌」の発刊が紹介されました。

（記念誌関連5面に）

8人の方（団体）へ、感謝状

一般財団法人多山報恩会様
国際ソロプチミスト広島
—中央会様
宗教法人法瀧寺様
故高橋昭博夫人
高橋　史繪さん
元広島ユネスコ協会会長
伊東　亮三氏
広島ユネスコ協会理事
新川　貞之氏
元広島ユネスコ協会事務局長
末野　忍氏
中内　祐秀氏

編集・発行／広島ユネスコ協会（広島市中区袋町6番36号　広島市まちづくり市民交流プラザ　メールボックス89号気付・☎090－7976－5940 藤井）

記念講演での前置き（全文）

広島ユネスコ協会設立40周年、本当に心からお祝い申し上げます。

また、本日は、このような大変に意義深い佳節にお招きいただき、お話をさせていただく機会を頂戴しましたことに心から感謝申し上げます。つたない話ではありますが、心を込めてお話したいと思います。広島に来て4月以来、できるだけ多くの方々にお会いしていますが、被爆者の方はもちろん、それ以外の平和のために活動されている方が、どれほど熱意を込めて活動されているか、日々感銘する毎日です。

13ある国連の専門機関の中で、ユネスコは最大規模の機関です。第二次大戦直後の1946年に、あまりにも悲惨な世界大戦の経験の中から、平和を守り築くためには、教育が最も重要であるとの認識のもとに誕生して、教育、科学および文化を通じて国際平和と人類の共通の福祉という目的を推進するために設立されたことがユネスコ憲章前文に明らかです。前文冒頭には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」とのあまりにも有名な一節があります。後ほどパワーポイントの中で触れますが、ユネスコのめざす根本のところは、私自身、43年の外交官生活の中で考え抜いてきたことと完全に一致します。そのような意味で、今日、皆さんの前でお話することを大変に名誉にも思い、楽しみにして参りました。

私は、いまこそ、このような市民の間の地道な活動が重要だと考えています。またこの広島の地でこのような市民レベルの活動を粘り強く起こすことは特に重要だと考えます。想像を絶する悲劇の中から心労を重ねて生み出された、世界のすべての人への広島のメッセージ。このような悲劇は誰にも繰り返させないとの、やむにやまれない人間の深い心情から発する尊いメッセージを、いまこそ力強く世界に、若い世代に発信すべき時だと考えます。

その理由を三つあげれば次のとおりです。

第一に現在の地域、世界情勢です。東アジアでは、北朝鮮の核問題や中国、韓国との間の領土や歴史認識をめぐる対立、さらには資源をめぐる競争が地域を不安定にしています。（やがて水争いも深刻化するでしょう。）広く世界をみれば、テロや紛争の危険はより差し迫った問題です。争いに備えるために軍備を強化するという意識の流れが強まっています。戦争や広島、長崎の被爆の実態をしらない若い世代が、軍備増強の方向に流れつつあるのも現実です。もちろん「戦争も核兵器もない平和な世界」を目指すうえで、当然、国や国際機関の役割と責任はきわめて重要です。それは、法律や制度をつくり、具体的な重大課題に対処する役割を担うからです。しかし、平和な世界を作るためのもっとも本質的な課題は、制度や条約の屋台骨をなす、民衆レベルでの発想の転換です。あれほど戦争に明け暮れていたヨーロッパの社会に、先覚者の長年にわたる努力により、共同体意識が成立したとき、ヨーロッパの共同体の中で戦争をするということは、少なくとも、なくなりました。同じ人間としての同朋意識をアジアにも世界にも広げていくことがもっとも本質的な平和への基盤づくりだと思います。世界は実に多様です。しかし、違いを争いの原因とするのでは

この10年が勝負　若い世代の力に期待

「核抑止」から「人間共和」の安全保障へ大転換を

〈略歴〉

1970年（昭和45年）3月法政大学法学部卒業、同年外務省入省、97年ウィーンの国際原子力機関（IAEA）事務局長特別補佐官、2010年駐クウェート国特命全権大使、12年退職、13年4月　公益財団法人広島平和文化センター理事長。65歳。

なく、違いを人間社会を豊かにする多様性として生かすためには、その前提に、同じ人間としての深い共通理解、同朋意識が不可欠だと思います。このために、市民社会の幅広い粘り強い運動を続けていくことが必要です。

第二に世代交代。世代交代の中で広島の被爆の実相を身をもって知っておられる被爆者の方々の肉声を直接聞くことはやがてできなくなります。いま、私たちは、その声を聞くことができます。しかし、それはいつまでも続くわけではありません。この10年が勝負だと思います。いまこそ、新しい幅広い動きを起こし、新しい世代の人が、新しい時代の感性と問題意識で、新しい動きを平和のためにどう起こしていくのか。それが被爆者の方々の希望する根本の方向にあっているのかあっていないのか。これを確認しておく必要があると思います。そうでなければ継承された動きなのか、まったく違う動きなのかがわからなくなってしまいます。それともうひとつ別の角度からいうと、平和運動といっても、一番苦労された方のことを考えない平和運動は根本的にどこか間違っていると思います。つまり、多くの被爆者の方はすでに亡くなっておられますが、多重性のがんや、様々な苦しみと闘いながら、亡くなった方々の思いも受け継いで、今も、声を発し続けておられる被爆者の方々がおられます。その方々に、「若い世代に、世界に間違いなく皆様の平和への深い願いを、メッセージを確かに継承して新しい流れが生まれてきています。確実な流れを作っていきます。」ということをお伝えすることがなければ、まったく無慈悲な平和運動になってしまいます。一番苦労された方々に報いるためにも、被爆者の方々がお元気なうちに、今こそ、真剣に新しい方向性を作らなければならないと感じております。

第三に、今、核兵器禁止条約への動きや、核兵器の非人道性に注目して、核兵器廃絶を目指す新たな運動が世界に広がりつつあります。世界の心ある人々とも協力してこの動きを推進する必要があります。壁は大きいかもしれない。私も、ここ（広島平和文化センター）に呼んでいただく前、現実を知るために、アメリカをずっと回って、平和運動家から政府の核政策に関与している人まで、いろいろな人と話をしてきました。間違いなく壁は大きいと思います。しかし、理想の実現にむかって、壁がどれほど大きいかを知らなければ、具体的な手を打つことはできません。大きな壁に向かって、たゆみない歩みを進めることによって、現実を変えることができると信じます。私たちの目指すところは、平和実現への根本的な基礎作業です。相互不信と大量無差別大虐殺の脅しで保とうとするゆがんだ安全保障、いわゆる核抑止の体制から、相互信頼、人間としての同朋意識を基礎とする、正常な安全保障への大きな転換の基盤を作る運動こそが、最も本質的なものであり、市民社会の運動にほかならないと思います。

私もヒロシマのメッセージを世界に、そして未来の世代に伝えるお手伝いをするため全力を尽くさせて頂きます。皆さんと力をあわせて新しい波を起こしていきたいと心から念願しています。

講演を聞いて（参加者の声）

今年、協会会員になった岩田公正さん（64）は、「小溝理事長のＩＡＥＡ（国際原子力機関）における核不拡散への果敢な働きを感銘深く聞きました。穏やかな笑顔のなかに迫力のある意思を持って、ことに当たられてきた氏は、きっとヒロシマの平和への行動の限りない推進力になるものと確信できました。

氏の言われたとおり、被爆者が切り開いて来られた平和の道を如何に次代につなぐか、大切な今後の10年間だと思います」と。

また被爆者で広島ユネスコ協会副会長の木村進匡さん（76）は、「小溝理事長はＩＡＥＡに長年勤務され、クウェート大使をされただけに経験豊かな内容であった。迫力のある話術とともに深い感銘を受けた。被爆者がその体験を人々に語り、その輪が広がることがいかに大切かを知ることができた。これからユネスコ協会も、地に根付いた着実な活動をひたぶるに続けたい」と固い決意を語っています。

恒久平和実現へ、被爆体験の継承を

～8・15「平和の鐘の集い」

広島大学附属高校ユネスコ班の訴え

「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」広島平和都市記念碑に書いてあるこの言葉の意味は、とても深いものだと思います。

1945年8月6日、午前8時15分、ここ広島に、世界で初めての原子爆弾が投下されました。3000℃を超える熱線により、人も物も影と化し、建物も街並みも一瞬で失われ、死亡者数は14万人を超えたそうです。

あれから68年がたち、現在の日本に住む私達の生活は、大変に豊かで、一見して、戦争とは全く関係のない日々を送っています。しかし、新聞やテレビのニュースを見ると、世界のさまざまな国で、今なお多くの紛争が続いており、私達のような子どもたちが、たくさんの命を落している現実があります。また、貧困により、1日に4万人もの命が失われているとも言われています。世界には、こんなにも多くの苦しんでいる人たちがいるのです。このような現実を考えると、今、世界は、けっして平和であるとは言えません。

世界の平和実現へ誓いも新たに開かれた「平和の鐘の集い」

村上　綾さん（英語で）

長友千紘さん（日本語で）

今の幸せ、命の大切さかみ締め行動しよう

では、世界中の人々が平和に暮らすことができるようにするため、私達に何ができるのでしょうか。広島市の爆心地の近くには、あの原爆の時の爪痕が、モニュメントとして、今なお、たくさん残されています。また、原爆を体験された方々が、「語り部」として、原爆を知らない私達に、あの時の出来事を語って下さっています。私達は、このように、平和について学び、そして考える、多くの機会を得ることができます。しかし、それらは、ゆっくりと立ち止まって、しっかりと考えなければ、過去のものとして、すぐに風化されてしまうことでしょう。記念碑に刻まれた、あの言葉のように、過ちを繰り返さず、世界の平和を創造するためには、まずあの日のことを、後世にしっかりと語り継いでいくことが必要です。戦争を体験した人、被爆体験のある人に、直接話を聞かせていただける、最後の世代である私達は、大変に大きな使命を担っていると考えます。

そしてもう1つ。私達は自分も含め、全ての人の命を大切にしなければなりません。戦争や災害によって失われた多くの命。世界には、生きたくても生きられなかった、多くの命があります。私達は、今生きていることのできる、この幸せをしっかりとかみ締めながら、自分の命を燃やしていかなければなりません。

これが、私達にできることであり、やらなければならないことだと考えます。平和な世界を創造するためできることは、私達の身の周りにも、生活の中にも、たくさんあります。恒久平和を実現するため、ともに行動を起こしていきましょう。

2013年8月15日

青少年・女性のページ

2013年度中国ブロック ユネスコ活動研究会in広島

中国5県のユネスコの仲間を広島に迎えて、来年2月、中国ブロック・ユネスコ活動研究会が開かれます。

この開催地は5県持ちまわり、5年に1回の受け入れで、広島市の会場は十数年ぶりです。

研究会のテーマは「ESD（持続発展教育）の推進がユネスコ運動の未来を拓く」。これは、広島ユ協が16年前から実施しているユネスコ活動奨励賞事業が、学校や地域で取り組まれている環境、文化、国際交流、平和などの活動を奨励するもので、ESDが目指すものと軌を一にするとして設けられました。

【主催】日ユ協連、広島ユネスコ協会、広島県ユ連

【後援】県教委、広島市・市教委

【日時】2月8日（土）13時半～9日（日）11時

【会場】広島市文化交流会館（旧広島厚生年金会館）

【参加費】研究会2千円　懇親会費5千円

【申し込み】12月20日までに事務局へ

【日程】第1日▽第16回ユネスコ活動奨励賞行事▽基調講演「ESD・ユネスコスクール」中山修一・県ユ連ESD・ユネスコスクール委員長▽第1回～15回奨励賞受賞団体事例発表＝大林小、幟町中、古田中、ひろしま音読の会、小河内O、平和大通り樹の会、広島ジュニア・マリンバアンサンブル。□交流会　第2日　国内委員報告、他□エクスカーション

主催県広島の積極的なご参加・もてなしをお願いします。

（副会長　亀井　章）

ユネスコ・S研究会 第2回は12月21日

今夏発足した県連ESD・ユネスコスクール研究会の第1回が9月21日、広島大附高で開かれました。

先ず、中山修一・ESD・ユネスコスクール委員長が「研究会立ち上げの経緯と将来」を解説。次いで和田文雄・研究代表（広島ユ協理事）が「ESD・ユネスコスクール研究会の目的・目標・今後の方針」を提起。続いてユネスコスクールの先駆け、広島大附高の「ユネスコスクール及びESD」の活動事例が、湯浅清治・同副代表（広島ユ協理事）から、1963年のユネスコ教育実験学校指定、ユネスコ協同学校等へ続く歩みが報告されました。教員ら約40名が参加。上々の滑り出しでした。

参加は広島大、県立大、市立大、広島大附高・福山附高、文教女子大附高、賀茂高、古田中、熊野・熊野東中、幟町小、県教委、国立教育研究所、ほか。

第2回研究会は12月21日、広島大附高で開催。

（副会長　亀井　章）

「高校生国際理解セミナー」12月23日に開催

国際平和に貢献する青年の育成を目的に、今年度も青少年センターと共催して、高校生国際理解セミナーを今月23日に開催します。

午前9時30分から、当協会副会長の中山修一氏による基調講演と、高校生による事例発表、意見交換を行います。

午後からは、八丁堀に移動して、コーアクション（世界寺子屋運動募金活動）を行います。多数ご参加ください。

（青少年育成部会長　國田　繁）

ユネスコスクール認定

平和や国際連携などを広げる国連教育科学文化機関（ユネスコ）の理念に沿った教育を実践するユネスコスクールに今年3月、広島市立古田中学校に続いて、広島市立幟町小学校が選ばれました。認定プレートが北川会長によって8月30日、瀬川校長に手渡されました。

（事務局長　藤井孝行）

最後のぺあせろべ

今年で最後となった、いろいろな国の違う人々が集う「ぺあせろべ」（第30回国際交流フェスティバル2013）が、10月27日（日）に開かれ、広島ユネスコ協会は、伝承あそびのコーナーを設け、ジャンボシャボン玉づくり、ミニ凧、竹馬、紙鉄砲、手作り細工、生活用品を利用した楽器演奏で、交流を深めました。

国際協力の日

11月17日（日）に広島国際会議場地下1階で開かれた「2013国際交流・協力の日」。広島ユネスコ協会は、この一年間に取り組んできた平和の鐘の集いや、高校生の国際理解セミナーなどの活動を、写真パネルで紹介しました。

40周年記念誌

広島ユネスコ協会設立40周年を記念する記念誌が発刊されました。冊子の中面は会長挨拶、お祝いのメッセージ、設立40年の歴史、活動奨励賞などの主な活動紹介、部会報告、歴代会長・副会長等役員、会員紹介。巻末には創刊以来84号を数える機関紙全号が収録されています。

大きさはB5判タテで約200ページ。400部印刷し、会員をはじめ市立図書館や県内のユネスコ協会団体などを中心に配布しました。

二〇一三年度 広島ユネスコ活動奨励賞決まる

第16回広島ユネスコ活動奨励賞は厳正な選考を経て5校、6団体に贈られることに決まりました。表彰式は来年2月8日（土）、広島文化交流会館で行います。

受賞校・団体一覧

【学校部門】

○広島市立狩小川小学校
○広島市立矢野西小学校
○広島市立段原中学校
○広島市立長束中学校
○広島市立大手町商業高校

【社会部門】

○NPO法人　友愛アカデミー
○広島国際ホームステイクラブ
○まちづくり市民グループ（可部カラスの会）
○みやじま未来ミーティング
○大人のかくれ家倶楽部
○本川地区女性連合会

日誌

〈'13年8月〉

12日／40周年記念誌編集会議（段原公民館）

15日／平和の鐘（広島平和公園鐘楼前）

20日／40周年記念事業・中国ブロック研究会打ち合わせ会議（市民交流プラザ）

26日／津波防災学習資料20冊広島市教育委員会に寄贈（大船戸市ユネスコ協会）

30日／ユネスコスクールプレート贈呈式（幟町小学校）

〈9月〉

3日／中国ブロック研究会打ち合わせ会議

14日（土）～15日（日）／日本ユネスコ運動全国大会（東京）

21日／広島ESD・ユネスコスクール研究会第1回研究会（広島大学附属高校）

23日／中国ブロック研究会打ち合わせ会議（市民交流プラザ）

〈10月〉

12日／理事会（市民交流プラザ）

15日／第2回ユネスコ活動奨励賞推薦委員会（国際会議場）

20日／40周年事業記念講演会「平和文化創造に向けたヒロシマのメッセージ」広島平和文化センター理事長小溝泰義氏　祝賀会（国際青年会館・文化交流会館）

27日／ぺあせろべ（中央公園）

〈11月〉

15日／ユネスコ活動奨励賞選考委員会（アステールプラザ）

17日／国際交流・協力の日（国際会議場）

〈12月〉

5日／理事会（国際会議場）

7日／ユネスコスクール地域交流in広島（中国新聞ホール）

21日／広島ESD・ユネスコスクール研究会第2回研究会

23日／高校生国際理解講座（青少年センター）

寺子屋運動募金（旧広島天満屋ビル前）

広島ユネスコ協会のひと顔

教育部会理事　藤原隆範氏

突然、偶然、それとも必然、広島ユネスコ協会に関わるようになりました。平成6年に突然、信井正行先生が広大附属高校にお見えになり、会員になりました。

平成2年に附属高校に赴任したとき、偶然ユネスコクラブの顧問が空いており、希望して顧問になりました。当時の副校長は太鼓矢晋先生で、顧問の永田龍男先生とともに、長く附属のユネスコを指導してこられていました。大学時代、伊東亮三先生に卒論・修論のご指導をいただき、広大附属高校が日本で最初のユネスコ協同学校であることは、永井滋郎先生からお聞きしました。

若き日、協会の重鎮の先生方から教えを受けた私が、ユネスコに関わるようになるのは必然かも。諸先生方の功績を汚さぬよう、微力ながら、ユネスコのバトンを受け継いでいきたいと考えております。

文化部会理事　髙田幸子さん

私がユネスコ協会を強く意識したのは平成23年秋、私が主宰する童謡愛好グループが藤井正一様のお世話で韓国を訪問し、大邱ユネスコ協会の方達と交流した時です。

短時間ではありましたが、豊かな心から醸し出される暖かさの漂うユネスコ会員の姿勢に接し、深い感銘を受けました。

その後、韓国ユネスコ大邱協会姉妹協会提携調印式、国連合唱団コンサート、新春フェスタ、とご招待を頂きユネスコ協会の活動の一端を拝見いたしました。

藤井様からお誘いを受けました時は、いささかの緊張を覚えましたが、広島市民として原爆、被爆、平和は常に胸に携えていなければと思い入会しました。

会員皆様のお導きのもとに歩みたいとおもいます。童謡愛好グループ代表、広島市立図書館メイト副会長。